広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	アンドレアス・ラスカラトス「モスクワのさる家庭で髑髏(しゃれこうべ)自らの語りたる物語」
Author(s)	橘, 孝司
Citation	プロピレア , 30 : 92 - 108
Issue Date	2024-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055889
Right	Copyright (c) 2024 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	

翻訳

アンドレアス・ラスカラトス
「モスクワのさる家庭で
髑髏（しゃれこうべ）自らの語りたる物語」

國立臺中科技大學應用日語系　助理教授
橘　孝司　訳

わたしはアルハンゲリスクの裕福でやんごとなき家系に生まれた。資産家の両親はわたしを慈悲深き領主とするべく、溢れんばかりの寵愛で包んでくれたのだが、見劣りせぬ教育を施すことも疎かにはしなかった。わたしは高校を終えるとペテルブルクの大学に遣（や）られ、哲学部にて修学することとなった。

大学では、ほぼ同年輩の若者たちと知り合った。彼らはことあるごとに帝国の政治体制への憎悪をわたしに吹き込み、自分たちのような虚無主義者に仕立てようとした。わたしたちは授業で顔を合わせたが、それ以上に皇帝一家を滅ぼす策謀をあれこれと練った。虚無主義はわたしの心に絶好の土壌を見出して根をひろげ、わたしは猖獗を極める虚無主義者のひとりになった。

成人になるかならぬかで、破壊の天使――人の命を奪い去る兵役――がわたしのことを思い浮かべたようだ。勉学の場から搦めとられ、兵舎へ、さらには戦場へと引き摺ってこられた。忍耐力もなく、武器の扱いも知らぬわたしはまさに兵士失格だった。

兵舎で寝泊まりする間はつねに病に悩まされた。そうして最初に送られた戦いでわたしは殺されてしまったのだ。誰一人殺すこともなく。

わたしの遺体は他の同類と共に戦場で野ざらしにされ、虫けらや鴉どもの餌になり果てた。

三年経ってわたしも他の戦友たちもすっかり骨と化していたところへ、ひとりの坊さんがやって来た。骨を探しており、頭陀袋はその類（たぐい）の品ですでに膨れてあがっていた。坊さんはわたしの頭を貧相な骸骨から切り離そうとしたが、すでに身体から離れているのに気づ

くと、頭を取り上げて頭陀袋に収めた。憐れな遺物たるわたしは、袋の中でこれまた憐れなる他の遺骨に囲まれることになった。高貴なる家系というものはかくのごとく姿を消していくわけだ。

坊さんはわたしたちを僧院に運び込むやいなや、取り出して洗い磨き上げた。それから釜に放り込み、つぶしたカーネーションの蕾を加えて茹でた。そのためわたしたちには馥郁たる香りが染みつく。いわゆる「聖なる芳香」というやつだ。それが黒っぽい色を帯び、かくして「聖なる遺物」が一丁あがり。釜から出すと、乾かしてからひとつひとつに名をつけていった。わたしは「洗礼者聖ヨハネの髑髏」だ。そんな名誉をもらえるとはひとつ坊さんに感謝せねばなるまい。ただし、そうすると、自分の人格を喜んで捨て去り、家族を否定したかのように見えてしまうのが問題ではある。しかし、言っておかねばならないが、坊さんは丹精込めてわたしの手入れをしてくれた。拭いて清めるのみならず、僧衣の布地に包み込み、教会の内陣に後生大事にしまってくれたのだ。

それから六か月間はそこで聖なるものと崇められた。ちょうどその頃、ロシアの女帝が聖者の遺物を高く買い求めているらしい、と僧院で噂になった。そこで坊さんはわたしを取り出し別の聖なる領帯（エピトラヒリオン）に包んだ。わたし専用に大急ぎであつらえた煌（きら）びやかな箱に入れ、同僚の坊主に供をさせてわたしをモスクワへ送った。当時女帝はモスクワにいた。

覆いを外されると、わたしはクレムリンの巨大な広間で女帝と対面していた。女帝はすぐさまわたしの前にひざまずくと、手を十字に組んで深々と頭を垂れた。十字を切り、わたしを拝んだのだ！

これはまた何という荘厳な光景だろうか！　ロシア女帝ともあろうお方が虚無主義者の髑髏を前にして額づき礼拝するとは！

目前で女帝がかくも遜（へりくだ）るさまを見せられると、わが命を奪ったのが皇帝の非道な戦争であったにせよ、満足すべきかなと思えた。その瞬間、皇帝の妃を奴隷とし、崇拝させていたのだから！

その刹那ある種の高慢がわたしの心に忍び込んで来た。空っぽの骨に高慢が飛び込むのなどたやすいこと。しかし、そのあとすぐに、自分が単なる商品として売り飛ばされ、坊さんがわたしの代価を懐に入れるのを目にすると、身を低くすべきはこちらだと得心すること

にはなるのだが。

しかし見よ、女帝はそれから宮廷の首輔祭[一]を呼び出し、わたしを「洗礼者ヨハネの聖なる髑髏」として下賜され、聖遺物の間に安置するように命じられた。命を受けた首輔祭は女帝に向かって一礼すると、わたしの前で九度十字を切って、われらが父よ主よ憐れみたまえともごもご言いながら抱きかかえて、色とりどりの骨が並ぶ別の間へ運んで行った。王宮の間というよりも墓地の遺骨安置所のように見えた。

人骨だけではない。獣の聖遺物も集められていた。キリストが棕櫚の葉と枝とともにエルサレム入城で乗ったとされるロバの四つ脚があった。ペテロが主キリストを否認した時に鳴いた雄鶏のくちばしに、聖アントニウスが溺愛した豚の歯もあった。他の人間の頭蓋骨や、さらには手や足の骨も並ぶ。焦げ跡の残った釜もあったが、かの七人の子供がそこで焼かれ茹でられて歌い踊ったと言われている遺物だ[二、原注一]。かたわらの羽は「喜びあれ」と聖母に受胎を告げるべく遣わされた天使のもの。要するに「キリスト教神話の考古学博物館」とでも呼びたい場所なのだ。

ある日女帝がさる聖者の下腿の骨の前でひざまずき祈りを捧げていた時、首輔祭はわたしの前を通ろうとして袖を下あごに引っ掛け、わたしは跳ね飛ばされて少しばかり骨が欠けてしまった。女帝はこの事故に大いに驚き気絶せんばかりだった！　泣きながら何度も十字を切り、首輔祭に向かって三十日間の断食と祈祷、さらにわたしの前で毎日三百回の「主よ憐れみ給え」を唱えるように厳命した。

憐れな首輔祭は毎日わたしの前で三百回の「主よ憐れみ給え」と「悔い改めん」を唱え続けた。

ところが、ある日我慢しきれなくなって、「主よ憐れみ給え」の途中で、目いっぱい手を伸ばして侮蔑のしぐさをしたが、勢い余って太い指がすっぽりとわたしの眼窩にはまり込んでしまった！　その後高く差し上げて元の台に戻したが。

冒涜のきわみなり、と誰しも言うだろう！　だが、神父たちにはそんなことは思いもよらない。哀れなるかな。あの者たちの念頭にあるのは自分のことばかりなのだ……

わたしは首輔祭による非道な侮辱に耐えた。この者は口さがない野蛮な人物だが、心は怯懦であるために、命なき人間の遺物に八つ当たりするのだろうと見て取

った。他方で、わたしは他の骨たちとの交流を楽しんだ。知り合いになると、彼らはそれぞれの物語を聞かせてくれた。

わたしの隣の髑髏は「大殉教者聖パラスケヴィ[三]」として女帝に敬われていた。「聖女さま」わたしは言葉をかけた。「とるに足らないわたくしごときが隣席を許されるとは身も縮む思いにございます」

「ちょいと、よそものさんよ」相手は言う。「あっしは聖者じゃないよ。マルコス・ボツァリス[四]を殺ったモーロ人なんで」

その瞬間わたしは驚いたのなんの！　だが考えてみると、こっちだってヨハネのふりをしているのだ。ここで演じられるのは喜劇、茶番ばかり。すべてが奇妙奇天烈のお笑いぐさに思われてきた。そこでかのロバの四つ脚に、本当にキリストが乗ったロバの脚なのか訊いてみた。何もかもがすっかり怪しくなっていた。

「おれたち四本はそんなんじゃないよ、だれひとり」ロバの脚は言った。「おれたちゃ、別々のロバの脚さ。だれもキリスト様に背を貸す名誉なんかもらってない。でもだからと言って、ここの人骨よりつまらない代物ってわけでもないぜ。おれたちゃ生まれたこの世で人様の役に立とうと額に汗しながら、干し草を喰って一生働き詰めだったんだから。なのに傲慢で薄っぺらな悪党のあんたら人間は、気のいいおれたちに辛酸をなめさせてだな、情けもかけず、自分らは不敬なことをやり放題だ。恥ずべき中でも極めつけはこれだろ。あんたらは死んでからも自分らで叙階を授けて神もどきになって、身内で崇拝し合ってるとはな……」

「そうは言うが」隣りの聖なる顎の骨が言った。「なんじらは主イエス・キリストが乗った聖なるロバの本物の脚ではないのであろう。わしが教会で護って来た真の神聖な脚ならば言い分が違うことだろう。実際にあの聖遺物は少なからぬ奇跡を起こしておるのだから。加うるに、他の動物や人の脚の骨にも癒しを施しておるし。なんじらは知らんだろうがな……」

「へっ、聖者さん、そいつは知らないけど」脚の一つが言った。「おれはあんたをよーく知ってるよ。かつてあんたのロバの後ろ脚の一本だったからね。ロバが死んだ時自分が切り取られたのは覚えてるさ。あんたはおれを日干しにしてから、教会の香炉のそばに置いたっけ、燃える蝋燭や香炉や燭台といっしょにね……あんたはロバの脚でみっちり稼いだ。村で死んだロバから夜

こっそり脚を切って、みんなに売りつけただろ、聖ロバ様の脚の骨だとか何とか宣(のたま)って……そいで、おれたちを村の家に運びこむと、村の女たちは接吻し、その前で十字を切ることにあいなったわけだ……誰もがあんたに燭台用の油を差し出し、それにそれに……」

しかしこれに対し、聖顎は歯軋りしながら、

「ちんけなロバ脚どもめ！　わが恩恵をかくも無礼に返すつもりか！　見たところ、豚に真珠を与えてしまったようだわい。なんじらを聖ロバ様に祭り上げて帝国の宮殿に住まわせてやったのに」

そこでわたしは、

「聖者様、堪(こら)えてやりなさい。死んだ者は恐れも情け容赦もなく、思ったままを口にするのですから」

それからフランス軍がやって来た。そこでモスクワの人々は対抗措置として、モスクワを焼き払うことにしたのだ！　高価な品々をクレムリンから運び出して隠し、地下に身を潜めることにした。宮廷のもっとも高貴な品々と言えば、わたしたち聖遺物のことだ。こうして首輔祭は命令を出し、わたしたちの搬出を指揮した。命令は突然出されたが、すみやかに遂行されねばならなかった。

しかし首輔祭にとって、このような大掛かりな運搬を監督するのはまたとない幸運だった。彼の脳裏には希望の沃野が大きく広がり、やりたい放題だ。混乱と闇に紛れて多くのことを安全に行うことができた。あたかも、戦争の準備を目論んで百万の大金をあと払いで借り入れるギリシャの総理大臣のようだった！

首輔祭は宮廷のさる貴婦人相手に、わたしを盗み出して売ろうという密約をいそいそと進めていった。大騒動に紛れた引っ越しはこのために実に有利だった。しかしながら、宿命(ペプロメノ)はわたしに味方して、ことを違った方向へ運ぶことになる。

荷運び屋は他の荷物とともにわたしを秘密の地下室まで運びこんだ。男には子どもが一人いて、大声で泣いては家族を手こずらせていた。男は子どもを脅かすために頭骨の中からわたしを盗み出した。家に持ち帰ると、男の女房は、これはいい案山子になるわとたいそう喜び、さっそく子どもに見せた。「ほーら見えるかい？」女房は言った。「泣いてると食べられちゃうよ」。子どもは怯えて声も出せず、ちっちゃな両手で目をしっかりと閉じ、背中を向けて眠り込んだ。

しばらくの間、わたしは子どもを怖がらせながら、静かに眠らせた。しかしその子の想像と神経に絶えず働きかける案山子の作用は、最後には逃れ難い結果となった。子どもは苦しみ苛(さいな)まれて狂ったようになり、痙攣したあげく悲惨な最期を迎えた。すっかり狂ってしまい生きる気力もなくしてしまったのだ。世の母親たちはこれを心にとめて教訓とされるように。

その間、首輔祭は聖ヨハネの髑髏を見失ったものの、べつだん慌てもしなかった。彼も彼で、クレムリンで大殉教者聖マリーナとして崇拝されている別の髑髏を失敬したのだ。実際は、皇帝暗殺を試みた狂信的なわが友の虚無主義者の骨だったのだが。これに札(ふだ)を付け、「斬首された聖ヨハネの髑髏」とした。

宮廷の貴婦人はこの髑髏を購入し、首輔祭に対し一部は高価なダイヤで、一部は金で支払った。互いに誓約を交わしてこの件を極秘にすることに同意し合った。しかしながら、「覆われているもので覆いを外されないものはなく、知られないで終わる秘密はない」と言う[五]。

荷運び屋の女房は子どもを亡くした後、もうわたしに用はないとばかりに、庭の石の上に放り出した！わたしはそこにしばらくいたが、とある払暁に樫鳥[六]が飛び来たると爪で掴んで運び去り、昇天大聖堂(アナレプシス)の鐘楼の上に置いたのだ。わたしはクレムリンでの札を頭につけたままだったが、鐘撞き番がやって来てわたしを見上げ、札を目にして驚嘆したのなんの！　近づくこともままならず、塔の階段を駆け下りながら、狂ったように奇蹟でござると神父たちにわめいた。神父たちは領帯(エピトラヒリオ)と祭服(フェロニオ)をまとい香炉を手にやってくると、わたしを取り上げ、讃美歌を唱えて香を炊きながら降りて行った。

かの貧しき者の家で蒙った恐怖の後では、この栄光はまさに受難の中に漂う芳香(パルサム)のごとしだった。かつての誉れに舞い戻ったことにわたしは満足を覚えた。

それゆえどうかわたしを責めないでいただきたい。礼拝、栄光、粉飾、追従、面と向かって告げられる賛歌は虚ろな髑髏たちのためにわざわざ作り上げられたものなのだ。それらが十分でない場合、物足りないなあと感じるのはわたしたちの本性に過ぎないのだから。

ひざまずいて十字を切ってくる群衆の間をぬって、神父たちは神に拝謁するかの如く近づくと、わたしを恭(うやうや)しく運び上げ、宝座(アギア・トラペザ)の上に据えて燭台と香炉で囲んだ。

しかしながら、もちろん霊的な理由で昇天した聖者が自らの意志で帰還し、すでに大聖堂にましますという噂は、電流のごとく大城市の中を駆けめぐった。

その時の住民たちの騒ぎは筆舌に尽くしがたい。大聖堂は押し寄せる人々の群れに立錐の余地なく、モスクワ中の鐘が興奮と歓喜をやむことなく伝えた。この奇蹟に対して政府はあらゆる教会に典礼を命じた。

町中が「聖なる髑髏」の帰還に湧きかえった。ダイヤと金で同じ聖者の別の髑髏を買い取った貴婦人は、首輔祭閣下を屋敷に呼びつけ、同じ聖者に二つの髑髏がある仔細を説明させた。

「こちらか」と貴婦人は言った。「あちらかが偽物ですわね。どこかの僧侶か神父が不敬を企んだに違いございません！」

「ああ、奥さま」首輔祭は答える。「神への愛ゆえに聖職者を指弾するなかれ、でございます。われらは聖なる者たちを非難してはならぬのです[原注二]。不幸なことに聖職者を指弾する者たちは社会に増え続け、われらの聖なる宗教を転覆させようとしております。これを救えるのは正教の教えをひたすらに信じる者のみなのです」

「神様のご加護がありますように」貴婦人は言った。「わたくしが聖職者を糾弾し、《聖なる方々》を不当に非難など致すはずがありません。神父様にはただ一つ伺いたいだけでございます。聖ヨハネは頭が二つあるのですか？」

「生前はたった一つ。されど身罷(みまか)ってのち、神慮により多くの頭(こうべ)を得たのです。そして、奥さま、これは歴史的真実なのですぞ」

「どういうことですの？」

「ご照覧あれ！　聖者が亡くなると、世界中が熱烈に遺骨を求めました。かの呪われしユリアノス帝は聖者の墓を暴き、骨を焼いて灰を宙に撒いたのですが、それにもかかわらず、神意によって、その灰はふたたび集まり、様々な骨を形成したのです。とくに頭蓋骨はその数、十ないし十二となり、その一つこそが……」

「わたくしが購入したあれ？」

「いかにも」

「それならば、首輔祭様、あちらの部屋へ一緒にいらしていただけませんか？」

別の部屋で彼を待っていたのは、貴婦人の二人の兄だった。腕っぷしが強く、迷信や偏見にもとらわれない

男たちだ。妹に向かってすでに、首輔祭は言葉巧みに二束三文の骨を高価な宝石と大金で売りつける罪悪感のかけらもない輩だ、と説いていたが、妹はそのことばを信じようとしなかった。そこで二人はとにかく首輔祭を罰することのできるきっかけをうかがっていた。言い含められた妹が首輔祭を連れてきて、二人の手に引き渡すや、《聖なる者》に拳骨を食らわせた。相手はドアから逃げ出せずにいたが、何とか見つけると駆け出した。そして彼らに侮蔑のしぐさをして、そそくさと姿を消した。

しかし、貴婦人の家に飾られたわが朋友は垢抜けない髑髏という烙印を押されてしまい、反対にモスクワ大聖堂に置かれたわたし自身の名声は天にも上った。教会はつねにわたしを拝む信者の群れに満ちていた！ 輝く蠟燭、燭台、香炉の数々がわたしを取り囲む！ 正装の聖職者たちが荘厳な隊を組んでわたしを崇める！ モスクワ中の鐘の音がわたしの名誉のために喜びを歌い上げる！ 大聖堂や町の教会でフランス軍を追い払う祈願の典礼だった！

わたしを神へと押し上げるこういった栄光すべてがわたしの空想を強くつつき回し、自分は真実これにふさわしいのだ、実際に何か人間を超えた存在に違いない、と信じ始めた。

空想が空っぽの頭に忍び込むのは簡単だ。入り口には理性という門番はいないし、中は広々としているのだから。

だが、なんということだ！ わたしは自らの神格化をそう長く喜ぶ運命にはなかった。悪党のフランス軍、髑髏をもてあそぶ不敬なる者どもがまもなくモスクワに侵入し、あらゆる場所を包囲しては、あちこちに騒乱と冒涜とをまき散らした。

大聖堂に入り込んだ輩は栄光に包まれたわたしを見つけるや、忌まわしいにやけ笑いを見せた。汚らわしい手でわたしに触れ、ある者はからかうようにわたしを撫で、ある者は煙草の煙を吹きつけて笑い転げた。またある者は洗礼を授けてくれたキリストはご機嫌いかがかねと尋ね、ある者は神様と親戚になれてよかったな、などと祝辞を浴びせかけた。他の者もそれぞれ勝手な言葉を吐き続けた。最後にはわたしを取り上げて、教会の中央の四脚の卓に置き、水煙管（ナルギレ）を持ってきて、吸い口をわたしの口に押し込んだ。わたしは水煙管を吸って

いるような格好になった。こうしてきゃつらはにやにや笑いながら立ち去った。

しかし、さらに別の運命がわたしを待っていた。その直後に別のフランス軍部隊が入ってきた。教会で水煙管を口にしたふざけた姿を見ると、ロシア人はこんなやり方で聖人を敬うのかと考えたのだ！　彼らはロシア人の暴虐（と自分たちで勝手に見なしただけだが）に対して唖然としただけにとどまらなかった。水煙管をくわえたわたしを写真に収め、フランスへ送った。「フランス軍はモスクワに入城し、かくのごとき野卑な状態にある教会と宗教を目の当たりにした！」と書き添えて。

その後にはまた別のやつらが来て、にやりと笑うと四脚卓ごとわたしを持ち上げ運び出して、式典の行列もどきに町へ持ち帰ろうとした。ところが教会の戸口の外まで来たとき、わたしは転がり落ちてしまった。しかし騒乱に酔いしれていたかの者たちは落ちたのに気づかず、愚かな行列を続けたのだ、卓上のわたしを運んでいると信じ込んで勝利の雄叫びをあげながら。

このわたしと言えば、転がり落ちたところをあなたがたの犬に拾われ、さきほどお宅まで運んでこられたというわけだ。

わたしの話はこんなところである。

原注

一　この奇蹟を信じない者たちは、これは踊りではなく、火が足の裏を焼いたために飛び上がったのだ、などと言っている。

二　僧衣をまとうものは神父であれ、修道僧であれ、「聖なる者」と呼ばれる。そして「聖なる者」である以上、不敬なことは黙認されるのだ！　彼らに対してはあらゆる非難が禁じられている。社会の堕落者であることは誰でも知っているのに！　「民を司牧する者」のこの醜怪さは別の根本的な醜怪さに基づいている。それは、他の宗教から笑われ軽蔑されないためには、わが聖職者間の対立を隠さなければならないということだ。現実には、他の宗教の者たちにはよく知られたことであり、わたしたちを嘲笑し軽蔑している。

注

一 首輔祭 Αρχιδιάκος。典礼で主教・司祭を補佐する助祭たちの長。

二 旧約外典「マカベア書」の第二書と第四書で描かれた、シリア王アンティオコス四世によるユダヤ人迫害のエピソードか？

三 大殉教者聖パラスケヴィ Αγία Παρασκευή Μεγαλομάρτυς。二世紀マルクス・アウレリウス帝時代の殉教者。その顎の骨はテッサリア教区の聖遺物となる。

四 マルコス・ボツァリス Μάρκος Μπότσαρης（一七九〇―一八二三）。ギリシャ独立革命期の英雄。イピロス地方のスーリ人を率いて戦い、カルペニシの戦いで銃弾を受けて戦死。

五 「マタイ福音書」十、二六。

六 樫鳥 κίσσα。カケスのこと。

解説

ここに訳出したのはアンドレアス・ラスカラトスの短編「モスクワのさる家庭で髑髏自らの語りたる物語」（«Ιστορία μιας Κάρας, διηγημένη από αυτήν την ίδιαν σε μίαν οικογένεια στη Μόσκα»）である（以下、「髑髏の物語」と略称）。

アンドレアス・ラスカラトス（Ανδρέας Λασκαράτος, 一八一一―一九〇一）は十九世紀の文学者で、エプタニサ諸島の一つ、ケファロニア島の町リクスリ（Λιξούρι）に生まれた。オスマン帝国の支配を受けることなく、西欧の影響が強いこの島々は、十九世紀にソロモス、カルヴォス、ヴァラオリティス、マヴィリスなど≪エプタニサ派≫と呼ばれる重要な詩人たちを輩出しており、ラスカラトスもまたこの派に分類される。

経歴

ラスカラトス家はもともとイタリアに起源を持つ名門の家系であり、父親ゲラシモスはリクスリに広大な地所を有していた。一人息子のアンドレアスは十二歳の時に島最大の町アルゴストリに送られ、伯父のデラデツィマス伯爵の庇護のもとで、優れた家庭教師たち

からイタリア語や古代ギリシャ語を学んだ。

一八二八年にケルキラ島へ渡り三年間イオニア大学（Ιόνιο Ακαδημία）の法学部で学ぶが、本業よりも文学への志向が芽生えていったようで、教師だったアンドレアス・カルヴォスの深い影響を受け、さらにはディオニシオス・ソロモスとも知り合い、親しい交流を通じて、民衆のことばと詩に魅せられていく。

卒業後ケファロニアにもどり、しばらくは下級裁判所で働いていたが、一八三六年から三年間パリへ、その後ピサへ留学した。この間に西欧の啓蒙主義、進歩思想に触れ、その後の思想傾向が形成されることになる。

弁護士の資格を修得して帰国したが、大地主の一人息子として甘やかされて育ったからか、生業には身が入らず、風刺詩を書いたりして気を紛らわせている。

一八四四年に父が死去し、生活に追われることになった。あげくに広大な地所を管理運営するのに疲れ果て、アルゴストリに転居。民衆のことばや牧歌的な土地へのあこがれからクレタ旅行に出発する。途中アテネに立ち寄るが、文学界では古風な擬古体・純正語が支配的であることに失望したらしい（純正語への反発・嫌悪は後の作品にも出てくる）。終生を通じて支持し自ら執筆に用いたのは民衆語である。ただし、当時は民衆語の正書法や文法が確立される以前であり、用いる文法規則には揺れがあることに加えて、故郷ケファロニアの方言やイタリア語の借用語も自由に使っている。

クレタからの帰還後、裕福な商人の娘ピネロピ・コルニアレニウと結婚。彼女は困難続きのラスカラトスを生涯支えた。ロンドンで単身働いていた頃（一八一五年）妻へ送ったソネットが残っており、過激な諷刺詩人とは思えない素朴な愛情を歌っている。

ラスカラトスの激烈で譲歩をしない性格、留学で培われた進歩的な世界観、遠慮仮借なく持論を表明する執筆態度は、波乱の人生につながっていった。

もともと島の宗教界や政治界の偽善・欺瞞を弾劾する告発文（λιβελογραφία）を書き反発を呼んでいたが、一八五六年に四十五歳で刊行した『ケファロニアの秘密』（*Τα μυστήρια της Κεφαλονιάς*）が大騒動を引き起こしてしまう。クセノプロスの言を借りれば「爆弾が炸裂した（η μπόμπα έσκασε[1]）」。副題に「ケファロニアの家族、宗教、政治に関する考察」（σκέψεις *απάνω στην* οικογένεια, στη θρησκεία και στην πολιτική εις την

Κεφαλονιά）とある通り、島の閉鎖的社会を形成する三つの相――男性中心で嫁資（ブリーカ）が何よりも重視される旧弊な家族、信心にとらわれた民衆を利用して蓄財に耽る宗教界、地縁でつながり私利私欲に走る政界――の各々を痛烈に皮肉り揶揄した。古い閉鎖社会の変革を意図したとは言え、急進的なやり方に激怒した住民から激しい抗議を受け、店では食料も売ってもらえずに家族は飢え、警察からは四十日間外出禁止を命じられたと言う。ついには島の府主教コンドミハロスにより破門と禁書を宣告される。やむなく南隣りのザキンソス島へ逃れたが、ここでも府主教コキニスに破門され、最後はロンドンまで逃亡することになった。

しかし、その後も古い因習に抵抗する過激な姿勢は変わらない。数年後帰還すると、一八五九年に新聞『灯火』（*Λύχνος*）を発行、時に「家庭的」、時に「戦闘的」と銘打たれた同紙に、社会を諷刺する記事を書き続けた。発行地をケファロニア、ザキンソス、ケルキラ、アテネと転々と変え、二度の中断をはさみながら九六年まで続いた。

『灯火』での激烈な攻撃がさらなる反発を呼び、ついには名誉棄損で告訴されて、四か月間投獄された。さらに一八六七年に『一八五六年ケファロニアの聖職者破門への回答』（*Απόκριση εις τον αφορισμόν του κλήρου της Κεφαλονιάς των 1856*）を出版し（執筆自体は五六年破門の直後）、またしても訴えられた。しかしながら、この頃には島の気風も変わってきており、裁判で陪審団は彼を無罪とした。

八〇年代になると、文学者としての名声は高まっていく。クセノプロスは（以下で述べる）短編集『ケファロニアの風俗・習慣・迷信』につけた長めの序文の中で（二）、一八八四年にアテネを訪問した高齢のラスカラトスが、文学者グループ《パルナソス》に熱狂的に歓迎され、講演には人々が殺到したさまを熱っぽく語っている。「《破門された》彼が群集の中で、罵りと唾棄と死の脅しを受ける代わりに、歓呼され、神のごとく称えられたのは波乱の人生でおそらく初めてだったろう（三）」

一九〇〇年に進歩的な島の主教ドリザスにより、四十五年にわたる破門がようやく解かれる。

翌年アルゴストリで九十歳の生涯を閉じた。

人物

どんな人間にも見られるように、ラスカラトスの中にも奇妙な二律背反性があった。それが形成された背景として、彼の出自と当時のエプタニサの社会情勢が重要である、とされる(四)。

戦闘的な諷刺詩人であり、民衆の道徳向上を訴え続けた人物と聞くと、急進的で革命的な社会改革家のイメージを受けるが、元来が広大な地所を持つ名門の末裔であり、それゆえに高いレベルの教育が受けられた階級に属している。

ケファロニアを始めエプタニサ諸島はベネチア、フランス、ロシアなどに占領されたのち一八一五年から英国の統治下にあったが、独立革命後はギリシャ本国へ統一されるかどうかの「エノシス問題」で意見が割れていた。ラスカラトスはこれに反対ではなかったが、早急な統一には懐疑的だったと言われる。政治的には「中道の保守派」(των συντηρητικών μετριοφρόνων(五))だった。彼の敵は、むしろ急進的なエノシス賛成派の政治家たちだった。(ちなみにエプタニサのギリシャ復帰が実現したのは、一八六四年ゲオルギオス一世治世下である。)

また教会批判にしても、決して神への信仰を問うものではなかった。それよりも、涙を流すイコンや聖者の頭蓋骨崇拝、治療用と称した油の販売(いずれも「髑髏の物語」に登場する)など、素朴な信者を食い物にする聖職者たちへの弾劾と言う意味だった。そこに見られる、「真理」と個人の「自律」重視の態度は、若くして培われた理性主義に支えられている。

このように、理性主義的な側面と保守的な側面が同居している人物だった。

作品

先に書いたように、ラスカラトスはエプタニサ派に分類されるのだが、抒情詩で名高いこの一派にあって、少し毛色の変わった存在であるように見える。もちろん詩も多く残している(最初の作品は詩集『リクスリ一八三六年』(*Το Λιξούρι εις τους 1836*)が、彼の特質は散文作品において際立っている。しかも、浪漫主義のような英雄、戦闘、恋といった内容ではなく、その激烈な性格を反映して、舌鋒鋭く現実社会を諷刺するのが持ち味である(六)。本人も「パルナソスの高峰に登るのが夢だったが、いつも途中で疲れ果て引き返した(七)」と吐露する。パラマス、クセノプロス、ポリティスたちは、

ラスカラトスは本質的に詩人・芸術家ではなく、思索家・観察者・哲学者であったと指摘する（八）。

しかし、詩作品の内容もまた風刺諧謔が多いことを見るならば、詩と散文という形式上の分類よりも、やはり諷刺諧謔という内容にこそ彼の独自性があると言えよう。作品表面の技巧や言葉の彫琢よりも、内容の先鋭化・明確化を優先した文学者だった。

『ケファロニアの秘密』以外の代表作について、簡単に触れておく。

同じ方向性をより一般化させて、人間の本性を鋭く暴いたのが『この人を見よ』（*Ιδού ο άνθρωπος*, 1886）である。古代のテオプラストス「人さまざま」やラ・ブリュイエールによる仏訳をモデルにしており、「厚顔」、「不信心」、「偽善」、「無頓着」、「煽動」といった（負の）個性が痛烈に皮肉られていく。例えば、「厚顔」（αδιάκριτος）は「道で出会うと相手の花を勝手に取って感謝しながら自分の物にする。集まりでは顔ぶれなど気にもかけずに割って入り、勝手に話し始める。他人の話の腰を折るが、折られるのは嫌い。大勢の一人と言われるのが嫌で、他の人が自分の周りに集まるべきだと信じ」といった具合で、最後は「厚顔なる者にはしつけが必要だ。本人のためにも社会のためにも」（以上筆者による意訳）と手厳しい。

本人も自身の個性が「喧嘩好き」（φιλόνικος）であると認めている。「冷静な人間なら蜂の巣など放っておくのだろうが、わたしは喧嘩が避けられない。《喧嘩好き》こそどうやら我が個性らしい」（Ο χαρακτήρας του φιλόνικου είναι κάπως ο χαρακτήρας μου）（九）。

晩年には『わが自伝的覚書』（*Βιογραφικά μου ενθυμήματα*）をイタリア語で執筆し始め、後にフランス語、ギリシャ語に翻訳された（ギリシャ語訳初版は一九二七年）。波乱の生涯が生々しく描かれたこの書を、ポリティスは作家の最高作であると評価している（一〇）。

「髑髏の物語」と短編集『ケファロニアの風俗・習慣・俗信』

「髑髏の物語」はもともと、死後出版された『ケファロニアの風俗・習慣・俗信』（*Ήθη, έθιμα, και δοξασίες της Κεφαλλονιάς*, Ελευθερουδάκης, Αθήνα, 1924）に収録された短編である。後になって、書名を収録作品のひとつで差し替えた『ロバの物語』（*Ιστορία ένος γαϊδάρου*, To

Βήμα, 2009）として出版され、現在も容易に読むことができる。

本稿の翻訳の底本にはクレタ大学電子図書館《Ανέμη》が公開しているデータを用いた。

https://anemi.lib.uoc.gr/metadata/3/9/7/metadata-46ecc6bc55361185bb0c01258b7fdd46_1245750596.tkl

短編集『ケファロニアの風俗・習慣・俗信』（『ロバの物語』）には「ロバの物語」、「女性像の物語」、「奇妙な夢」など短編二十篇が収められている。各篇が奇妙な語り手によって物語られ、人を食ったような諷刺が続く。いずれも「たくましい諷刺の力に加えて、巧みな語りと豊かな想像力（η αφηγηματική δεξιότητα και η πλούσια φαντασία του）（１１）」に支えられている。

例えば「ロバの物語」（«Ιστορία ένος γαϊδάρου»）で言うと、副題に「村のロバたちに向けて自ら語りたる」（«διηγημένη από αυτόν τον ίδιον εις τους γάιδαρους του χωριού του»）とある通り、ロバに関する話ではなく、ロバ自身が語り手となり、「おれはさる議員の厩で生まれ、オヤジの跡を継いで政府公認のロバになったってわけよ」と自らの数奇な生涯を披露しながら、利権とコネに凝り固まった政界・法曹界を笑い飛ばす。

同じ趣向で、七面鳥、オランウータン、女性の人形、聖母のイコン、埋葬された女、スリッパなどが語り手の役を引き受ける。「髑髏の物語」も同じ線上にあり、戦死した貴族の子弟の恨み節の中に、聖遺物崇拝や聖職者の欺瞞などが織り込まれている。作品によってはあまりに風刺が過ぎて悪口雑言に終始する作品もなくはないのだが、「髑髏の物語」は、ストーリー自体が奇抜で楽しんで読める小品になっている。（この点を評価したものか、『現代ギリシャ短編アンソロジー』*Ανθολογία νεοελληνικού διηγήματος*, 3τομ., Θεσσαλονίκη, Εκδ. Οργανισμός Μαλλιάρη, 1977, Εποπτ. Γ. Κ. Ζωγραφάκης にはこの作品が選ばれている。）

他にブラックな語りと筋が楽しめるのは、聖母のイコンがインチキ神父の悪行をつぶさに語る一種のピカレスクもの「悪魔神父」（«Ο Παπα-Διάολος»）であろう。また、「死せる女の物語」（«Ιστορία μιας Αποθαμένης»）は亡くなった女が墓の中で話をするという設定からしてホラー物になりそうだが、作家の狙いは厚顔無恥で好き勝手なふるまいをする葬儀の参列者をからかうことにあり、ポオの閉所恐怖症的な「早まった埋葬」など

とは全く別の方向を向いた作品である。

他に特筆すべき作品として、ＳＦを思わせるタイトルの「木星への旅」(«Ταξίδι στον Πλανήτη Δία») がある。夜の浜辺に寝そべり夜空を見上げていた主人公は、木星に魅了されどうしてもその星の住民と交流したいと願いが嵩じた挙句、朝方に射してきた太陽の光をつかんで星まで飛んでいく。すぐに巨大な木星人たちによって昆虫のように採集され、珍妙な問答が始まる。地球の革命や神学といった些事は相手に全く通じない。

現代ギリシャＳＦは、もっと時代の下ったディモスティニス・ヴティラス『地球から火星へ』(Δημοσθένης Βουτυράς, *Από τη Γη στον Άρη*, 1929)、あるいは、ペトロス・ハリス『地球最後の夜』(Πέτρος Χάρης, *Η τελευταία νύχτα της γης*, 1924) がその濫觴とされている。ニコス・セオドル＆フリストス・ラゾス編『ギリシャＳＦビブリオ』(Νίκος Θεοδώρου & Χρήστος Λάζος, *Βιβλιογραφία Ελληνικής Επιστημονικής Φανταστίας*, 1998) も「木星への旅」には触れていない。「木星への旅」はＳＦ風の味付けをしてはいるものの、科学技術で世界や宇宙の神秘を探るというようなものではなく、「髑髏の物語」や「ロバの物語」同様、現実社会の諷刺狙いの作品としてみるべきなのだろう。

しかし、幻想作家マキス・パノリオスは同短編の特異な設定に注目し、自身が編纂した『ギリシャ幻想短編集』(Μάκης Πανώριος, *Το ελληνικό φανταστικό διήγημα*, 1987) 第一巻に収めている。また、David Connolly 編訳 *The Dedalus Book of Greek Fantasy* (Dedalus Literary Fantasy Anthologies, 2004) には英訳 «Journey to the Planet Jupiter» として収録されている。

解説への注

（一）『ケファロニアの風俗・習慣・俗信』へのクセノプロス Ξενόπουλος の序(1924:23)

（二）Ξενόπουλος (1924:5ff.)

（三）Ξενόπουλος (1924: 9)

（四）Παπαγεωργίου, p. 382

（五）Παπαγεωργίου, p. 383

（六）ロドリック・ビートン『現代ギリシャ文学序説』の記述（Beaton, 1994: 49, 61）では、エプタニサ派には「小説」が欠けており、散文は短い諷刺作品に限られる、とされている。しかも、例に挙げられるのはソロモス「ザキンソスの女」とラスカラトスだけであり、断片で

伝わる前者は評価困難とする。要するに、エプタニサ派の散文で見るべきは、ラスカラトスの諷刺短編のみということになる。（「ザキンソスの女」については拙稿「現代ギリシャ幻想小説序説：後ビザンツ期から十九世紀末まで」『プロピレア』二十三号三十八頁以下に少し書いておいた。）

（七）Πολίτης (1985 : 158)

（八）Πολίτης (1985 : 158-9)

（九）Παπαγεωργίου, p. 396

（一〇）Πολίτης (1985 : 160)

（一一）Παπαγεωργίου, p. 378

原典

Τα μυστήρια της Κεφαλονιάς· ή σκέψεις απάνω στην οικογένεια, στη θρησκεία και στην πολιτική εις την Κεφαλονιά. Κεφαλονιά, τυπ. Η Κεφαλληνία 1856.

Ήθη, έθιμα, και δοξασίες της Κεφαλονιάς· Πρόλογος Γρ. Ξενόπουλου. Αθήνα, Ελευθερουδάκης, 1924.

参考文献

Παπαγεωργίου Αλέκος Γ., «Λασκαράτος - Τυπάλδος Ανδρέας», *Μεγάλη Εγκυκλοπαίδεια της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας* 9. Αθήνα, Χάρη Πάτση, χ.χ.

Πολίτης Λίνος, (1985) *Ιστορία της νεοελληνικής λογοτεχνίας,* Αθήνα.

Beaton Roderick, (1994) *An Introduction to Modern Greek Literature,* Oxford University Press.